



内外新報

第 二 十 號



西垣文庫 特
 文庫 10
 7352
 4



特 文庫10
7352
4

西頭文庫

内外新報止観

慶應四年閏四月



○同日月十日出水更津より舟の来状
一 去月中より苗下北花をせし浪徒去る七日舟ヶ崎沢
の近をある河^ガ仲と云村又出張せり官軍薩州勢介一
隊と我軍相成り辰下刻以より軍敗を退をせし中且
つ近隣連合の諸家應援の兵と出を者ありとぞ年長
より合戦やし砂兵をく何地へり退を然れども近
傍の民密兵火よかるもの頗る多きよし
一 高尾市中の騒ぎ一方ありん婦女子の泣叫ぶ聲甚だ

しく然れども和約合よく大捷ハ和少く江戸の方へ
逃退き申す

一八日高木より二之里脇海岸の山合ひあり砲烟あは
たしく相見へ日夜あり一失火有る曉天は玉つ
徒減せり

○才八月二十日早我団四月九日成る外團人よ
り横濱新聞紙局に送る書状と送出す

余今銃「フラン」ス波戸場と通すの事一「改」又雷管
と共け放致せん斗「用」させし小銃を携へたる日
本の歩兵凡そ十六人併り小銃より上陸せり成見か

けあり

戦闘の關係なき地を通りたるは斯く奇怪ある蕃邦
とある事ハ成し之外團ありハ殊なき事あり

横濱の地ハ固より日本の國より屬せし事とソレども此
頃せる簡と携へたる兵隊と上陸せしめざる故日本
政府ハ掛合たりと然る事ハことあり

亦く兵卒薩州の氣質も又相分らば一足付り出
來せし者も兵庫の茶敷と踏むるあり

昨日到着せし砲隊ハ一列は新聞も奪く唯「アビ」ニ
「ニヤ」の戦車の幸ししと早きり「セ」ト此ハ死し信譽

いふとくく故とせり

「アビシニヤ」戦争の本軍洋々又横濱ベリリ「新聞」
又見「あり」ゼ「アドル」ハ「エ」國王の名録「虐」の者あり
去る廿四日二十日即我廿月八日の夜箱館の介國入
居面地跡くは焼失せり

○仙臺よりの朱状

去月中旬の以余津退討としく仙臺勢搦出し一書
ハ白川頭又玉々丈より矢吹頭突門取山本宮二本松
編修「激」と素朽より津頭分まを引續居りハ不令津勢
備苗代より山越ゆあり激と陣營と藝管いゆしハ中

勝敗未く詳あり

○首夏書感

失名氏

漠々愁雲西復東起居淚濺草堂中昇平二百餘年業
誰把神思付太空

後所言頌頌より去月廿八日出立しそ来里し著の活し
又世程新保より脱走兵之介人斗り歎然としそ上京の
執り付尾藩人殺右左衛門めとしそハ國治ハ向ハハ中
道中少く野所戦争の情然とそ有く危前□□敵敵の情
名こそあるうちハ戦ハハ止むまドよハ風浪あり

○題志うん

出清茂録

大まきのみちしん見之末とて是をる國のうみ草の
あきゆしきや

のこころとありふ日もねをまねあうらやましく
いむい候々

○四月十一日東叡山より

の清甚書
宮極上系々候つよく来る十九日 清極奥清治定
の寺日光東台其介清配下向の不及中魔下く士多輩
江戸市中近在近郷多哀訴歎歎申出就中市民最近
近郷々候を身命を以て守護 以與旨又孫 清極奥

に相成ゆとて産業をも相廢ゆ飯中出日く東西又
奔走以て中不容易騷擾す何分 所發途茲に遊以同
清と系々候と人心法難以近所延引候 候出以同不
清極奥くは通達了有候事

右、付四月十日東叡山に清極としし諸寺山伏
百姓所人等罷出諸寺諸山伏等正腕をく殊く介立
流又省く見物弱安釋集以多し以中

○四月廿又日熱督府より會津白く清甚付書

清甚書

松平肥後守事退く暴動又及以飯以以得た既又罷冠

く後一第我紅寮以上の悔悟伏羅所仁意を以て於
之ハ寛典日了紅寮の同人場遠を以て仕向 所少
法小事

熱腎府番謀

所少法く執証有降取仕以て徳川家名く成以不見
屋内と附罷仕間安受悟より存く同了成所少法其れ
いひと

隣臣

本年肥後守

熱腎府番謀府中

○

頃日我社中の新聞を投與する者比々相屬と是を以て
未だ稿を脱せざるもの半筐日及る校合出来次第印
刷の多しを得共前後時日の相違多分可有之者官の
著意参照せむこと以希望を

中津侯歎願書 仁和寺宮上書諸方の法届書等逐次記
載を以て

相州小田原武州八王子邊の浪士屯集の報告あり
大君御辭職以來の事を知らんと欲せむ追々發見する
所の前記を見るが如く京師當時の職任の別集と詳あり

○
一 社友新局を開き日々新聞と號し第一號より引續き
出版と玆説定めて多かるるなり

